



キトラ古墳の調査

2002年度、キトラ古墳の壁画を調査保存するための仮設保護覆屋が建設されることとなった。これを受けて、墓道部、墳頂部そして建物範囲について発掘調査をおこない、墓道と盗掘坑を確認するなど、今後に向けて重要な知見を得ることができた。上の写真は、1回目調査時の全景。左後方に畝傍山。右の写真は、南西から見た墓道。閉塞石に描かれた朱雀まで、あと2m。

本文6頁参照（撮影：井上直夫）





関野貞関係資料 明治時代の平城宮跡

明治32年(1899)測量の平城宮図。上が南。写真は第一次・第二次の大極殿・朝堂院地区。小字名・境界・道路を記し、草地を水色で表示する。朱書は関野の注記である。大極殿・朝堂・回廊の基壇などが草地となっている。また第二次朝堂院が小道で区画されるなど、よく古代の遺構の面影を伝えている。第二次大極殿上は「小字ダイコクデン」、第一次朝堂院東第二堂は「小字大内ノ芝」とある。湿損による変色が惜しい。

本文42頁参照 (撮影：中村一郎)

唐長安城大明宮太液池の調査 (太液池西岸)

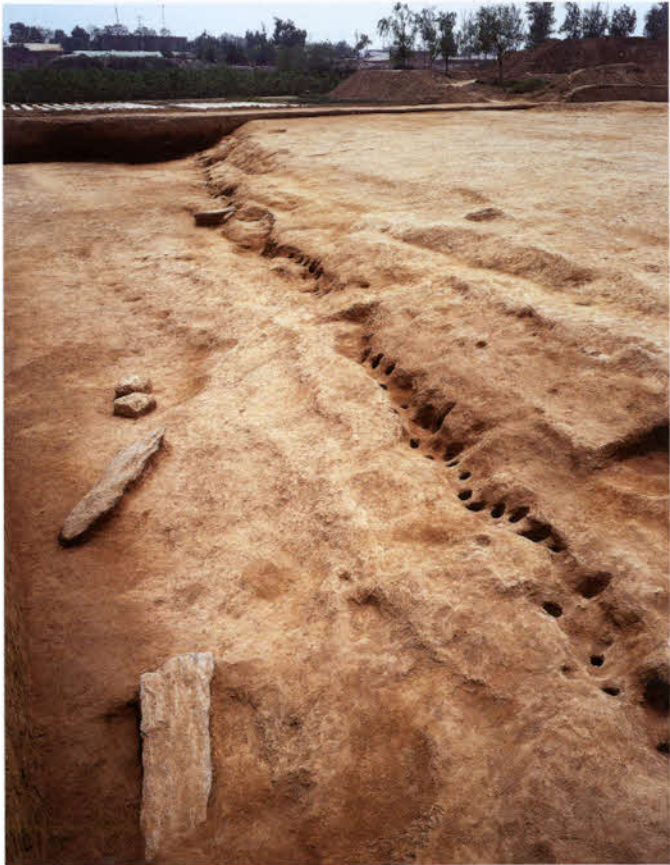
池底で護岸の杭列跡と思われる小穴列を検出した。また、池岸に置かれていた可能性のある1.5～2mの石が出土した。

本文3頁参照 (撮影：中村一郎)

太液池跡の現況 (三清殿基壇跡上から南東方向を撮影)

太液池は主要部が東西約500m、南北約300mの大きな池であった。現在、池跡の大部分は畑であり、地形は池南方が一段高くなっている。写真奥が現在の西安市中心部。

本文3頁参照 (撮影：中村一郎)



宮内庁所蔵金銅製四環壺の調査

明治年間に飛鳥の古宮土壇周辺から出土した金銅製四環壺について、宮内庁との共同調査をおこなった。壺は全面に鍍金を施すが、内外面共にさびが著しい。外面全面に毛彫りによる華麗な唐草文などを刻み、文様間は魚子文で埋めつくす。X線透視撮影などによって、胴部の唐草文の中に、鳳凰と思われる鳥の毛彫り文様を確認した。

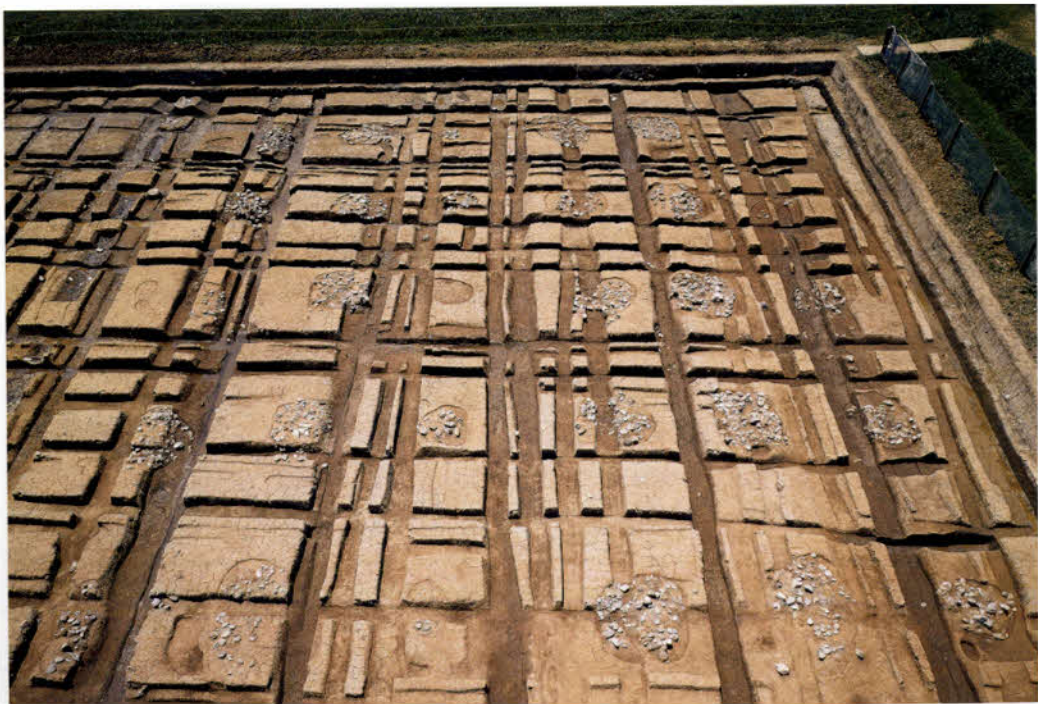
中右は底部。外表とは異なる砂粒が錆着する。中左は肩部の環。周りの四葉形の青錆は皮革製品などの痕跡か。下左はA面鳥形の頭部。鋭い嘴と眼が特徴的。下右はB面鳥形頭部の火焰宝珠。

本文46頁参照（撮影：牛嶋茂・井上直夫）





藤原宮朝堂院東第二堂（飛鳥藤原第120次調査）
東第二堂は、梁行2間の身舎の東西に庇がつき、さらに西側には孫庇を伴った、切妻式の建物であったことが判明した。梁行が5間に及ぶ朝堂は他には知られておらず、きわめて特異である。遠景は香具山。北西から。本文93頁参照（撮影：井上直夫）



東第二堂の北半部
桁行15間（約62m）の長大な建物であるが、そのうち5間分を検出。棟通りにも礎石据付掘形が存在し、床張りであった可能性がでてきた。北から。本文93頁参照（撮影：井上直夫）

石神遺跡（飛鳥藤原第122次）

昨年度調査区の北隣接地を発掘した。手前にSF4100の路面と溝SD1347、その奥にB期の溝がL字形にみえる。右側中ほどに石敷と井戸。

画面右奥の森が雷丘、その手前が雷丘東方遺跡である。東から。

本文114頁参照（撮影：井上直夫）



石神遺跡出土木簡

天武・持統朝を中心とする7世紀木簡の一大資料群である。古代国家形成期を解明する重要な手がかりとなろう。縮尺1:2

本文119頁参照（撮影：井上直夫）





第一次大極殿院西楼（平城第337次調査）

第一次大極殿院の南面築地回廊に取り付く西楼の遺構を検出した。調査の結果、西楼は1973年に確認された東楼の遺構と、規模、構造だけでなく、造営、解体過程まで共通することを確認した。第一次大極殿院の南辺には、中央の南門を挟んで、東西に双子のような楼閣建物が建ち並んでいたことになる。北から。

本文140頁参照（撮影：杉本和樹）

西楼の柱抜取穴

西楼の解体時には、地中深く埋められた掘立柱を抜き取るために、巨大な抜取穴が必要であった。側柱筋では抜取穴が東西に連結し、その深さは3 m以上におよぶものもあった。多くを人力に頼る当時にとっては、相当な難工事であったに違いない。 本文144頁参照（撮影：牛嶋 茂）



西楼出土木簡

第一次大極殿院南面の西楼の柱抜取穴からは西楼解体にともなって廃棄された木簡約1500点、大極殿院南面回廊基壇下の整地土からは約20点の木簡が出土し、第一次大極殿院の成立・解体の時期を考えるための重要な手がかりが得られた。

本文147頁参照（撮影：中村一郎）



第二次朝集殿院南門の調査（平城第326次調査）

壬生門と第二次朝集殿院南門の間に位置する第二次朝集殿院南門を調査した。門基壇にともなう掘込地業や地覆石据付痕跡、門両側に取り付く掘立柱塼柱穴、および門北側の道路側溝や旗竿を立てた跡とみられる南北柱穴列などを検出した。

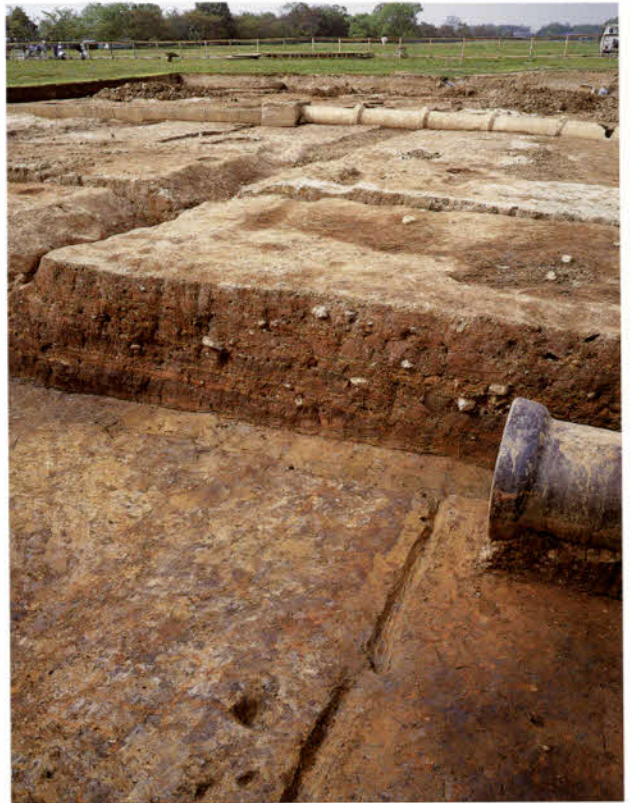
南門の掘込地業は基壇とほぼ等しい範囲で掘られ、版築工法で築成されていた。地業西端から東西幅3分の1ほど東の位置では、地業最下層に版築範囲を仕切ったとみられる堰板を立てた痕跡を検出した。南東から。

本文134頁参照（撮影：中村一郎）



東面回廊の内庭側に取りつく階段

回廊西側の雨落溝が、回廊の柱間一分間だけ内庭側に張り出しており、階段の出がわかる。この階段の位置から東面回廊の中央部に開く門の位置が明らかになった。東北から。（撮影：杉本和樹）



興福寺中金堂院回廊（平城第347次調査）

興福寺境内整備構想にともなう第5年次の調査。中金堂院回廊東南部を発掘し、第1年次と第2年次の調査と合わせて東面回廊と南面回廊東半を全面発掘したことになる。北から。

本文154頁参照（撮影：牛嶋 茂）





一乗院の調査（平成第350次調査）

奈良地方裁判所庁舎建て替えにともなって実施された発掘調査。建物基礎下部分からも各時代の遺構が検出された。北西から遠方に興福寺五重塔を望む。手前左に寢殿の礎石据付穴列、中央には縦にSD7800が断続的に見える。

本文162頁参照（撮影：杉本和樹）



瓢箪池の下から姿を現した「泉水」

昭和38年に建てられた鉄筋庁舎によって南半を覆われていた瓢箪池の下層でみつかったSE8465。北側の池に水を供給するために掘られたものか？幕末の絵図に見える「泉水」に該当する。（撮影：中村一郎）